

平成二十二年十月一日発行（毎月一回）日発行一 通巻八四九号

火星

平成二十二年十月号



七曜抄 (七)

山尾玉藻

二百十日馬を曳きゆく水しぶき

鶏頭に赤子がおいでおいでせし

宇治橋を渡つてきたる月の客

月上りくるいろいろの膝頭

いちまいづつ月の暈となりゆけり
こつぽりの二人の過ぎし秋の水
山の芋提げきし男やくかいな
麦とろを食べ過ぎし貌向きにけり
人ごゑに水の急げる寒露かな
烏頭詠んでこのごろやさしかり

太白星

柳生千枝子

応接間塵ひとつなし百合ひらく
接点となるまひる野の百合ましる
夏がすみ銀座通りに浴き陽
夏霞故郷の山河寂として
日盛の出窓に見えて百合の白
水あたりして姑眠る覚ますまじ
水中りしてより少女透きとほる
滝道のしばらく水を逸れにけり
夏袴うしろ姿の父立てり

杉浦典子

水の上の草の穂にゐる天道虫
空つぼの部屋に夕立の窓ありけり
銚粽京都に住める子と歩き
佃島に貝のひも買ふ祭雨
蜘蛛の囿に風きて蜘蛛の走りたる

浜口高子

翅割つて閉ぢてそのまま天道虫
ナプキンを膝一ぱいに青水無月
蛇渡りたちまち花藻覆ひけり
ゆふやくる箆笥の中に遍路衣
雷鳴の洋上に顔洗ひをり
ハンカチを畳み重ねて子の遠し
田蛙の俄か網戸のほつれかな

火星作品

山尾玉藻選

さつきから青田めでゐし川祓
神戸深澤鱻

國酒を重ねてあはし帰省かな

夏負けやプラネタリウムすぐ夜に

山鉾の解かれし物に符丁かな

除雪車の赤く塗りある稲の花

花菖蒲開けつばなしで出で来たる
大和郡山城 孝子

七夕や金剛山の水飲んで

くちなはの失せし葎の何ともな

月影に犬拭く少女夏休

昼寢覚蟬の木の影ふるへをる

濡れて着く登山電車や朴の花
八幡丸山照子

チャップリンの通ひし小径白あぢさゐ

地獄谷の噴煙とどく泳ぎかな

夕焼くる夫助手席に拾ひけり
夏帯の影のちいさき鳥辺山
藪漕ぎに夏うぐひすのついでくる
日傘傾け浅沓を通しけり
すててこの胡坐のあやし上手なる
神棚を上げ築番の日数かな
片蔭に入りたる肩をゆるめけり
さかしまに尻上げ透くる子蠟螂
どの木にも雨粒光る大祓
山背吹く水沼へ鳥の急降下
烏賊くさき風に吹かるる帰省かな
喪の家に米とぎぬたり凌霄花
夏瘦のはじまつてゐる海の紺
子燕の羽根小さきざみに待つてをり
三伏の葛叢そよぎをりにけり
海の日の灯台の影踏みぬたり
沙羅咲いて苔にきれいな水たまり

宝塚蘭定かず子

伊丹渡邊美保

明石戸栗末廣

選のあとに

山尾 玉藻

夏負けやプラネタリウムすぐ夜に

深澤 鱧

迷わずに選んだ一句である。しかし、「夏負け」と「プラネタリウムすぐ夜に」の接点や、句が醸し出す詩情をこと細かく説明すると、却つてこの句の本来の味が失せていくような気がする。ただ確かにおさえておきたいことは、苦も無く生じた人工的な空間と脆弱な生身の人間との間に生まれる、不協和音、食い違い、違和感がこの句の髄であるということ。それさえ理解できれば作者の屈折した思いが充分慮れる。選句は直感、選評はその直感を確認する作業に過ぎない。

花菖蒲開けつばなしで出できたる

城 孝子

この句も理屈なしに飛び込んできた一句である。ちよつと外へ出かけた作者は水辺の「花菖蒲」に眼を止め、ふと戸口に錠をかけてこなかったことに気付いた。それは花菖蒲が風に吹かれてちよつと翳りを見せた瞬間だったかも知れない。日常のさりげない景がこころに一瞬働きかけることがあるが、そんな瞬時をすかさず捉えた一句にした。

夕焼くる夫助手席に拾ひけり

丸山 照子

夕刻、作者が勤め帰りのご主人を駅まで出迎えに行ったとも、たまたま運転中に歩いておられるご主人を見つけたとも解せる一句であろう。しかし、この句の場合は後者として鑑賞すると一句に深い味わいが生まれる。夕焼けに染まりながら歩かれるご主人の姿に、どことなく憂愁が漂ってくるからである。すると、一見現実的な表現の「拾ひけり」にも、ご主人の漂わすメランコリーに微妙に反応した作者のころまでも垣間見えてくるようである。

神棚を上げ築番の日数かな

蘭定かず子

作者が覗いた築番小屋に小さな「神棚」が揚げられていた。作者はその景より、朝夕に頭を垂れて築の無事を願う「築番」の敬虔な姿を思ったのだろう。下五「日数かな」より、築番の絶え間ない苦勞やそれにかける時間が思われると共に、世間から切り離される日毎の寂しさまでもが偲ばれてくる。見事に集約され下五にこの作者の技量を感じる。

喪の家に米とぎみたり凌霄花

渡邊美保

零れながらも次々と咲きつぐ茜いろの「凌霄花」は、旺盛な生命力のシンボルとでも言えるだろう。葬の家にはいかに不似合なその屈託のない明るさが、却つて家うちには漂う暗さを増幅させている。米をとぐ作者の手元にも一層深い翳りが纏いつく。(以下略)

恒星圈

同人 I

丸山照子

赤城嶺の開拓村のねむの花
早見表にたしかむ齡夾竹桃
橋の上の人の夕づく梅雨晴間
駅降りてすぐにちやんこ屋朝曇
荒梅雨の明けし百花の天井画

深澤 鱧

山田美恵子

月鉾の混みあうてゐる鉾の内
塩つけて食ふ海の日青トマト
海の日やいづれ空向く蟹の穴
夏痩せて太郎の本を出して見す
釘打つて紙を降らせて夏芝居

登山地図と重ねし歌の小冊子
梅檀の花散る先の風見鶏
筒鳥やかな文字美しきデウスの書
裸等を祓ふ社の大夕焼
木偶小屋に鎚の音する夏の月

堀 志 皋

山本耀子

斑猫や農夫の渡る長者橋
流れつつ鯿食うてをり渡来亀
初蟬のすぐに止みたる銀閣寺
軽鼻の子や二人となつてしまひたる
エメラルドグリーンを泳ぎけり

奉納神楽鬼出て夕立止みにけり
宵宮の灯の力や人群れて
流れをり昨夜の祭の果てし川
土用芽刈る垣の四角のほひけり
老犬のあゆむ影ゆく夏の月

獅子座

山尾玉藻推薦

前田 忍

つなぐ手の湿りてをりし螢の夜
河骨の影する水の碧かな
早苗風ボンネットバス来て止まる
口の端の笑つてをりしサングラス

井上 淳子

那智滝のしぶきに蟹の瞬けり
百ばかり煽ぎし母の古団扇
海の日や国生みの島ふくらめる
川原に干しある鵜飼の船飾

涼野 海音

面接の帰りに茅の輪くぐりけり
蟻の道たどる一匹づつたどり
かなぶんを踏んでしまひし音なりし
シエルティーの毛を梳いてゐる薄暑かな

川端 俊雄

天逝の帝に合歡の花ひらく
竹の子の皮干されある札所寺
満天の星となりけり出水村
浜屋顔つぎの大浪待ちをりぬ

松井 倫子

猫ひらたく溝をはしりし朝曇
巡礼の鈴通り過ぐハンモック
日盛の葉蘭の叢をあやしめり
日盛の壁に仰ぎし津波線

田中 文治

緑蔭に一灯うけし伎芸天
一片の雲に夕日の釣忍
尺取虫とどまり背筋伸ばしけり
流星や琥珀色なる食前酒

天谷 翔子

火蛾踏みし母の蹠を拭ひけり
旧姓を呼ばれ振り向く合歡の花
見せられし火蛾の銀粉付きし指
携帯電話開けば火蛾の寄り来たる